様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１０６５

研究課題名（和文）外国出身児童生徒の進路支援おける地域連携のアクター分析―三重県の事例を中心に

研究課題名（英文）Analysis of Promoting Actors for Further Education of Immigrant Children: Case Study in Mie Prefecture

研究代表者
江成　幸（Enari, Miyuki）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：２０２６９６８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：　外国出身の児童生徒が増加傾向にある三重県では、各地で日本語および教科の補習支援が行われている。本研究は、教科学習と高校進学に向けた支援を中心に、県内の複数地域における連携の状況について分析をおこなった。現在では県内全般に、教育委員会、国際交流の公共団体、学習支援ボランティア等の「支援アクター」の役割分担が確立しつつある。今後は、継続的なネットワークのもとで、外国出身の保護者への進路情報の充実が望まれる。

研究成果の概要（英文）：As the number of immigrant children who attend public schools in Mie Prefecture increases, local educational boards and volunteer groups offer Japanese language classes as well as study support programs. Among those efforts, we researched local supporting actors focusing on teenagers who aim at high school education or even higher.
In Mie Prefecture, the network including public agencies, local NPOs and voluntary learning support groups has been served effectively. In terms of this age group, it is also important for supporting actors to provide immigrant parents with accurate information regarding academic and career options in Japan.

研究分野：社会学

キーワード：外国人児童生徒　進路支援　多文化共生

１．　研究開始当初の背景

本研究における「外国出身児童生徒」とは、外国人の親(保護者)の来日に伴い、日本で学齢期を過ごす子どもたちを指す。1990 年に日系人の在留資格が緩和されて以降、南米出身者を中心にその数は増加してきた。

外国人児童生徒は、来日時の年齢や学年によって日本語習得に差があるため、多くの公立学校で、国際学級の取り出し指導や、通学区の在籍校とは別に初期適応教室を設けている。日本国内の外国人学校から編入する児童生徒にも、同様の対応を要する。さらに将来の進学・就職のために、日本語習得にとどまらず、教科内容の理解も必要性が高い。

これらの課題に対応するため、外国人児童生徒の就学・進学支援は、学校、教育委員会や国際交流協会によるコーディネート、民間ボランティア団体などの連携が重要となる。

２．研究の目的

三重県では、製造業に従事する日系人を中心に、家族と一緒に来日して定住する子どもが増えている。本研究は、外国人住民を持続的な地域コミュニティの担い手と位置づけ、公立学校での学びに加え、地域における日本語・学習支援との有機的な補完関係について研究する。学校教育から進学、就職へと、外国出身児童生徒の進路を橋渡しする地域連携の構築に注目する。

３．研究の方法

三重県内の複数地域について、教育支援に関わる公的機関およびボランティア組織の取り組みを調査する。質的調査にもとづき、実践に関わるアクター(行為主体)を抽出し、支援連携の枠組みとアクター間の役割分担を明らかにする。これと平行して、調査対象地域で実施した住民アンケートを分析し、生活全般のニーズと教育上の関心を把握する。また研究期間中に、県外視察を実施する。

この研究プロジェクトを通じ、多文化的コミュニティにおける児童生徒への進路支援の課題と道筋について、各地域における組織的リソースおよび住民の関係性をふまえて考察する。

４．研究成果

(1) 三重県調査の成果報告

【平成24年度】三重県内の外国人登録者が多い自治体のうち、四日市市に関する研究を進めた。また、松阪市および津市の初期適応支援教室、外国人児童生徒向けの進路ガイダンス、高校での日本語学習支援の実施について、教育委員会と協力しながら情報収集を行った。

四日市市は多文化共生を市政の目標に掲げ、外国人児童生徒に関わる教育施策として、日本語の入門を教える初期適応支援教室、在籍校で取り出し支援を行う国際学級、地域における日本語・学習支援教室が実現されている。ブラジル人住民の比率が高いUR集合住宅を擁する地区を対象に、フィールドワークおよびヒアリングを継続し、外国人児童生徒を対象とした学習支援の実践事例をまとめた。また住民アンケートのデータをもとに、公立学校での受け入れおよび外国人の子どもたちの将来に関し、日本人・ブラジル人双方の住民意識を分析した。

外国人の子どもの教育に関し、ブラジル人住民は、就学支援・奨学金と日本語の向上が必要だと考えている。日本人住民の間では、言語・習慣を日本に合わせてほしいという意見が多数派であり、具体的な教育支援の重要性が十分に認識されているとは言えない。日本人とブラジル人の期待が一致しない領域

を、公立学校および地域の日本語指導・学習支援活動が担っていることが明らかになった。

【平成25年度】四日市市笹川地区で実施した調査結果の概要を、住民向けリーフレット「多文化共生に向けて」にまとめた。また、三重県各地で行われている外国出身児童生徒の支援のうち、四日市市の「子ども教室」事業、津市教育委員会の進学ガイダンス事業、鈴鹿市の県立高校における外国人生徒の受け入れ状況、津市の日本語教師ボランティアによる高校進学準備学習会について、聞き取り調査および参与観察を行った。

【平成26度】外国出身児童生徒を対象とした支援について、四日市市、津市、松阪市での聞き取りをもとに整理した。まず、四日市市の多文化共生推進モデル地区である笹川地区では、「笹川子ども教室」が２年目を迎えた。これは地区の子どもすべてを対象とする活動で、おもに南米出身の子供たちが国語と算数の学習に取り組んでいる。国語は、漢字検定を目標とした書き取り練習および単語学習から、文章理解につながる教材を採用する方針にシフトしている。通常はボランティアによるマンツーマンの補習教室だが、クリスマス懇親会なども企画されている。また日本語教室は、大人と子どもを対象に、笹川共生サロンが継続的に開催している。

以上のように、地域コミュニティの中に教科支援・日本語支援の場が整備されていることが特徴と言える。また学校教育現場で外国人の子どもに接する教員による研究会も、定期的に行われている。高校進学の観点からは、学習面以外に、家庭の経済的困難、通学に便利な高校が近くにないといった課題が指摘されている。

津市では、高校進学ガイダンス「学校へ行こう in 津市」の夏と秋２回開催が定着している。外国人保護者に日本の高校を知ってもらう機会として、夏のガイダンスは県立高校を会場に実施している。中学校を通じた案内のほか、関心のある保護者が小・中学生や幼児を伴って参加することもある。プログラムは各学校による説明のほか、外国出身生徒と保護者の体験談が組まれており、毎回好評である。希望により通訳が付くため、日本で子どもの進学をサポートしたい保護者にとって有益である。県立高校の入試情報は、毎年、三重県国際交流財団（MIEF）が各国語に翻訳している。高校進学ガイダンスは、津市教育委員会と三重県教育委員会、県教委と MIEF というアクターの連携に支えられた事業である。

三重県下の外国人住民の多い自治体では、公立小中学校を中心に、日本語教育の充実が図られている。文部科学省が提唱する JSL（第二言語としての日本語）の教材研究のほか、鈴鹿市を嚆矢とするバンドスケールの開発がその例である。バンドスケールとは、子どもの日本語レベルの目安を具体的に設け、指導にたずさわる複数の教員が協議して判定するものである。津市や松阪市でも、教員の日本語指導研修や、日本語習得の評価基準作成などが行われている。

このように、公立小・中学校に在籍する外国人児童生徒の受け入れに関しては、県、市、地域のボランティによる支援態勢が整ってきたと言える。

高校および高等教育の段階に進んでいる子どもたちも多い。ある県立商業高校では、フィリピン人生徒の増加に対応するため、日本語教育を専門とする国語教諭を雇用した。資格カリキュラムの一環として、日本語能力試験合格者も出している。来日から間もない生徒でも、母国で身につけた英語力に加え、日本語 N3 レベルを取得した結果、就職につなが

った例がある。

移民2世ないし1.5世の大学生への面接調査にも着手した。収集した2、3の事例では、公立学校で日本語支援を受けた期間がごく短いか、日本生まれもしくは幼少期から日本在住のため特に支援を受けていない。いずれも、日本語習得を早く終え、教科学習に専念できたケースである。

（2）県外視察の成果報告

視察先：神戸市・海外移住と文化の交流センター（旧神戸移住センター）移住ミュージアム、(財)日伯協会　への訪問・調査

日時：2015年2月17日（火）10:00~12:30

参加者：藤本久司（研究分担者）、ジョイア（外国人の子どもの学習支援ボランティア）大学生メンバー4名―医学部2、工学部1、教育学部（院）1、人文学部1：計5名

【経過】津市内で週1回外国人の子どもの学習・進学支援を行ってきた大学生とともに訪問・調査を行った。大学生 4名のうち、工学部1名男性は祖父母がブラジルに移住し、自身は小学校の時に渡日し愛知県で教育を受け三重大学に入学した日系三世の学生、人文学部1名女性は父母がブラジルに移住し、現在サンパウロ大学に在籍し、交換留学として三重大学で1年間学んでいる日系二世である。それぞれ訪問の最後に、神戸から旅立った父母または祖父母の氏名がデジタル化されたデータにあることがわかった。なお、どちらも父母、祖父母がこの地から旅立ったことについては、訪問日まで聞かされていなかったとのことであった。

訪問の最初に日伯協会の三井敏明氏から本センターからの移民、移住の歴史や経緯に関する講義が1時間ほどの後、学生との質疑応答があった。その後、移住ミュージアムの 1～3 階の展示資料についての詳しい説明を聞いた。

この日の訪問・調査については、日伯協会の会報「オ　ブラジル」第967号に詳細記事と写真で掲載された。

【当日の感想レポートから（抜粋、及び、文意を変えずに一部訂正）】

私はブラジル生まれの日系人です。幼いころから父からよく移民の話を聞きましたが、正直なことを言いますと、自分には関係のないことだと思っていました。今回、センターを訪問する機会が与えられ、自分にとって非常に印象深かったです。60年前、父が同じところで、どんな気持ちで故郷を離れブラジルに向かったのかと考えると、言葉で表せない複雑な気持ちになりました。この歴史を守ってくださっている日伯協会の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。帰国して、ブラジルの社会で日系人として誇りを持ってがんばっていきたいと思っています。K.N（人文学部・サンパウロ大学生）

私は神戸を訪れ学んだことは、これまであまり学校で扱われていないことばかりでした。自分も日系ブラジル人なので、これまでにいくつかの記述を見てきましたが、簡単に「移民は苦労した」ということで済まされていました。しかし、実際は、私たちには想像できない困難の数々を克服してきて、今現在、私たち日系ブラジル人が生きていられるのだということを実感しました。これまで自分のルーツを知りたいという意欲があまりなかったのですが、留学生の1人が祖先を資料館の中で見つけた様子を見ていたら、自然と自分も知りたいと思いました。Z.P（工学部）

＊ *なお、彼はこの訪問後、祖父母の家族の記録が見つかった旨の連絡をもらい、氏名資料を受け取った。*

（3）結論

外国につながる子どもへの支援は、日本語教育、教科学習、進路ガイダンス、キャリアガイドなど、年齢やニーズに対応する多様な内容を含んでいる。このため、「外国につながる子ども」に関わる学校、地域のボランティア、行政が相互に協力し、個々の子どもの目標に合わせ、複数のアプローチを用意することが重要である。

日本で大学教育を受けさせたいと希望する外国出身の保護者が多いことから、大学へ進学した事例の収集と分析は今後とも重要であろう。教育への期待は、労働市場の厳しい競争を背景としており、子ども自身の目標形成の契機にもなっている。親子が共有している教育目標を、主体的で幅広い選択肢につなげるには、保護者に届く進路情報の充実が欠かせない。地域の支援アクターは、児童生徒の日本語・教科学習にとどまらず、やさしい日本語や通訳翻訳の必要性に配慮しながら、保護者との信頼関係を構築することが重要と考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① 福本拓・藤本久司・江成幸・長尾直洋「集合的消費の変質に着目した外国人受け入れ意識の分析―三重県四日市市の日系ブラジル人集住地区を事例に―」『地理学評論』88巻4号、2015年、未定〔査読有、掲載確定〕

② 藤本久司「外国につながる子どもの学校外学習支援の課題―三重県内の 4 つの活動事例から―」『人文論叢』第 32 号、2015 年、95-107〔査読無〕

③ 江成幸「外国につながる子どもの進路支援―三重県内の取り組み―」『地方自治みえ』第 256 号、三重県地方自治研究センター、2013 年、1-3 〔査読無〕

④ 福本拓「地域コミュニティの観点からみた外国籍住民をめぐる防災の課題―三重県四日市市を事例に―」『コリアンコミュニティ研究』第 3 号、2012 年、52-64〔査読無〕

⑤ 藤本久司・江成幸・福本拓・長尾直洋「ブラジル人住民の文化ギャップと適応の課題:四日市市笹川地区の調査から」（資料調査報告）『東海社会学会年報』第５号、東海社会学会、2013 年、121-129〔査読有〕

⑥ 江成幸・藤本久司・福本拓・長尾直洋「定住ブラジル人の子どもを地域にどう受け入れるか―三重県北部での日本人住民調査―」『人文論叢』第 30 号、三重大学人文学部文化学科紀要、2013 年、23-37〔査読無〕

〔学会発表〕（計 9 件）

① オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス「ニューカマーの子どもたちの進路選択と将来の展望―ブラジル・ペルーにルーツを 持つ子どもたちの事例調査から―」異文化間教育学会第35回大会、同志社女子大学 今出川キャンパス（京都府京都市）、2014年6月7日

② オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス「義務教育終了後の進路選択をめぐる教育課題―外国人児童・生徒の体験からの考察―」日本教師学学会第15回大会、環太平洋大学 第１キャンパス（岡山県岡山市）、2014年3月8日

③ 江成幸・藤本久司・福本拓・長尾直洋「ブラジル人移住労働者の生活構造におけるジェンダー要因の分析」第86回日本社

会学会大会、慶応義塾大学・三田キャンパス（東京都）、2013年10月1日

④ 江成幸「外国人の子どもの教育に関する日本人住民の意識--三重県北部におけるブラジル人集住地区の分析―」第60回関東社会学会年次大会、帝京大学八王子キャンパス（東京都八王子市）、2012年6月10日

〔図書〕（計3件）

①福本　拓・藤本久司・江成　幸・長尾直洋（共編）『四日市市笹川地区における「多文化共生」に向けた課題―日本人・外国人住民アンケート調査報告書―』三重大学人文学部多文化共存センター、2013年、118

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

住民向け配布資料：

① 「多文化共生に向けて--笹川地区の住民アンケートから―」調査結果報告リーフレット、三重大学多文化共存研究センター、2014年3月

② "Rumo à Convivência Multicultural: Conclusão da enquete dos moradores do bairro SASAGAWA" Emissão: Universidade de Mie, Área de Ciências Humanas, Centro de Estudos de Coexistência Multicultural (junho de 2014)

６．研究組織

(1)研究代表者

江成　幸（ENARI, Miyuki）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号：20269682

(2)研究分担者

藤本久司（FUJIMOTO, Hisashi）
三重大学・人文学部・准教授
研究者番号： 40345963

福本　拓（FUKUMOTO, Taku）
宮崎産業経営大学・法学部・准教授
研究者番号： 50456810

(3)連携研究者

高畑　幸（TAKAHATA, Sachi）
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：50382007

(4)研究協力者

長尾直洋（NAGAO, Naohiro）
東洋大学人間科学総合研究所・客員研究員

オチャンテ　村井　ロサ　メルセデス（OCHANTE, Murai Rosa Mercedes）
NPO法人 Mixed Roots x ユース x ネット★こんぺいとう